

発達障害児・者におけるスポーツ参加の選択プロセス ー障壁と対応の関連現象からー

吉岡尚美^{*1} 重藤誠市郎^{*2} 内田匡輔^{*3}

The Barrier and Coping Decision-Making Process for Sports Participation of
Individuals with Developmental Disabilities

by

Naomi Yoshioka¹⁾ Seiichiro Shigeto²⁾ Kyosuke Uchida³⁾

Abstract

This study aims to clarify the barriers and coping decision-making processes in sports participation for individuals with developmental disabilities. The data was analyzed qualitatively using the Grounded Theory Approach (GTA). The results generated a central category, “obtaining sports participation opportunities in the community and schools,” along with 12 related categories, and three distinct decision-making processes were identified. Regarding an approach to sports participation for individuals with development disabilities, it is noteworthy that experiences in adapted sports environments enable individuals with developmental disabilities not only to continue participating in sports but also to perceive withdrawal from sports, often viewed negatively, as an acceptable choice. To develop a substantive theory, theoretical saturation and fitness and relevance of the processes should be confirmed in future research, while implementing and verifying countermeasures against barriers.

I. 緒言

2025年度の障害児・者のスポーツライフに関する報告書によると、障害児・者の週1日以上

の運動・スポーツ参加率は、7～19歳が38.5%で、前年度と比較して4.1%増加しているが、20歳以上では32.8%であり、一般成人と比較して低い傾向が続いている（株式会社リベルタス・コンサルティング、2025）。このような障害児・者のス

*1 東海大学体育学部生涯スポーツ学科

*2 新潟医療福祉大学健康科学部健康スポーツ学科

*3 東海大学体育学部体育学科

スポーツ参加の現状についてスポーツ庁は、「東京オリンピック・パラリンピック競技大会により、スポーツを通じた共生社会の実現に向けた機運が醸成されたが、成人一般に比べて障害者のスポーツ実施状況が低調であることから、障害者特有のスポーツの実施に係る障壁の解消と、スポーツ施策の実施体制上の課題の解消を図ることも重要である」とし、「障害者が生涯にわたってスポーツを実施するための基盤を整備する観点から、身近な場所でスポーツを実施できる環境の整備等を図る」ことを重視している（株式会社リベルタス・コンサルティング、2025）。

障害児・者のスポーツ参加には、交通アクセスや建物に関する物理的障壁、施設の利用制限などの制度的障壁、情報の提供不足などの文化・情報面の障壁、そして偏見や差別、無理解、無関心といった意識上の障壁が存在する（藤田、2008）。海外においても、建物や環境のバリア（Built and natural environment barriers）や障害児・者を受け入れるために必要な制度の欠如（Policies and procedures barriers）、情報の不足（Information related barriers）、障害児・者に対する理解不足（Emotional and psychological barriers）など、同様の障壁が指摘されている（Leitschuh and Johnson, 2024）。塩田（2022）は、日本の障害者のスポーツの課題は、スポーツを行っていない非実施者の割合が諸外国（英国、カナダ、オーストラリア）と比較して高いことであると、障害者優先・専用のスポーツ施設の少なさ、公共交通機関を利用してスポーツ施設に通うことの困難さと送迎の問題、障害のない人の障害者スポーツに対する興味関心の低さと障害理解の不足を障壁としてあげている。また、これらの要因は多様に絡み合っており存在すると述べ、日本の教育や雇用の構造も障害者のスポーツ参加をさらに困難にする要因になっていると指摘している。

障害はその特性や制約される機能によって対応すべき課題も異なる（塩田、2022）ことから、障壁の解消についても障害種別ごとに検討する必要があるだろう。発達障害は、独特のこだわりや対人コミュニケーションの苦手さ、集中力の拡散

と注意の散漫、情報理解の困難さなどに加え、不器用さや運動技能遂行の遅さと不正確さを有することが多い（アメリカ精神医学会、2023；宮原、2017）。そして、これらの特徴は発達障害児・者の運動・スポーツ実施の妨げとなることが指摘されている。山下ほか（2010）は、発達障害もしくはその傾向がある当事者は、手先の不器用さ、感覚鈍麻・過敏、空間認知や方向感覚、固有感覚の問題、追視の困難さ、体の動きの調整や予測動作の難しさが、ボール運動をはじめとする様々なスポーツでの障壁になることを明らかにしている。また、Yoshioka, Shigeto, Uchida and Yamato（2016）、吉岡・重藤・内田（2023）は、発達障害のある子どもを持つ保護者を対象にした調査から、学校体育における困り事、地域のスポーツクラブに参加することの困難さ、周囲の理解不足、子ども自身のモチベーション維持の難しさがあることを明らかにするとともに、発達障害児・者特有の障壁として、障害特性要因、施設サービス要因、人的要因、方法要因、スポーツ参加要因の相互関連性を示している。

スポーツ参加の場面において、これらの障壁に直面し、対応しているのは当事者と家族である。綾屋（2022）は、当事者の語りや報告が、発達障害の合理的配慮や基礎的環境整備を具現化するために重要であると述べている。また、杉山・澤江（2024）は、余暇としての運動・スポーツの価値をふまえ、自閉スペクトラム症者の運動・スポーツを支援するうえで当事者の視点が重要であると指摘する。さらに、発達障害児・者がスポーツを始めたきっかけとして「家族に奨められた」ことが大きい（株式会社リベルタス・コンサルティング、2025）ことや、Shields & Synnot（2016）が「障害のある子どもが身体活動に参加するかどうかは、保護者および家族の関与が極めて重要である。保護者は、子どもの意思の代弁を担う存在として、経済的支援および実践的支援の両面からその参加を支えている」と述べるように、保護者や家族は発達障害児・者のスポーツ参加との関連性が強いと考えられる。そこで本研究では、身近な場所での発達障害児・者のスポーツ参加における障壁と課題を解消する手立てとして、

当事者や保護者・家族は障壁にどう対応し、スポーツ参加の形を決めているのかというリサーチクエスションのもと、発達障害児・者のスポーツ参加の選択プロセスを、当事者と保護者・家族における障壁と対応の関連現象から質的に明らかにすることを目的とした。

尚、本研究は、地域における発達障害児・者のスポーツ参加にかかわる障壁と対応を対象とするため、スポーツを広義に捉える必要がある。阿部（2018）は、スポーツには遊戯性と競技性の両方が文化的価値として存在し、その二つの連続体概念を包摂するのが身体活動性であるとし、レジャーとしてのスポーツ、競技としてのスポーツに優劣はなく、双方に価値があるものだとしている。また、萩（2001）は、スポーツを「体力向上の身体活動」「精神的充足の身体活動」「社会的関係形成の身体活動」「身体活動あらゆるレベルでの競技成績の追求を目的とした身体活動」を含む「身体活動の総体」として、「新ヨーロッパ・スポーツ憲章」第2条のスポーツの定義をまとめている。さらに、宮地（2016）は、「体育・身体活動・スポーツ国際憲章」をもとに、身体活動は体育・スポーツ・運動・余暇身体活動・生活活動を含むという見方を示している。これらの概念と定義を踏まえ、本稿における「スポーツ」は「体育・競技・余暇活動・生活活動における身体活動」と意味づけた。

Ⅱ．方法

1. 対象者

本研究の目的を達成するために、「関心ある現象を説明する理論を導き出すための意図的な調査対象の選定」（橋爪，2012）である理論的サンプリングを用い、発達障害を対象としたスポーツ教室（以下Xスポーツ教室とする）の参加経験がある発達障害児・者の保護者と当事者を対象として調査協力を求めた結果、5名の保護者（母親）と2名の当事者から協力を得ることができた。対象者の概要は表1のとおりである。最初のインタビュー対象として、①スポーツ活動の継続の有無と②子どもの性別をふまえ、対象者A・B・C・Dを選定した。次に、対象者A・B・C・Dのインタビューの分析で見出された結果をもとに、③子どものスポーツ参加に対する家族のかかわり、④子どものスポーツ参加に対する自発性と積極性の度合い、⑤環境の変化とスポーツ参加の関連を見出すことを意図して、対象者E・F・Gを選定し、インタビューを実施した。

2. 調査方法

対象者（保護者のみ）には基本情報（年齢、性別、就労状況、子どもとのかかわり、運動習慣、スポーツに対する嗜好、発達障害のある子どもの情報：年齢・性別・障害種別・診断時期・通っていた学校種・運動習慣・療育経験）を得るために事前質問紙調査を郵送法で実施した。その回答を

表 1. 調査対象者の概要（調査当時）

対象者	年齢	子どもの性別	子どもの障害	修学した学校（学級）	療育経験期間	Xスポーツ教室	
A	母親	54	男性	自閉スペクトラム症 知的障害	特別支援学級（小・中） 特別支援学校（高）	7～15歳	継続
B	母親	57	（対象者CとDの母親）				
C	当事者	27	女性	自閉スペクトラム症 知的障害	特別支援学級（小・中） 特別支援学校（高）	2～27歳	退会
D	当事者	27	女性	肢体不自由 知的障害 （脳性まひ）	特別支援学級（小） 特別支援学校（中・高）	1～27歳	退会
E	母親	52	女性	自閉スペクトラム症 精神遅滞	特別支援学級（小・中） 特別支援学校（高）	3～4歳	退会
F	母親	49	男性	自閉スペクトラム症 知的障害	特別支援学級（小・中） インクルーシブ教育実践推進高校	2～16歳	継続
G	母親	42	女性	知的障害 高次脳機能障害	通常学級（小1のみ） 特別支援学級（小2～中） 特別支援学校（高）	5～18歳	継続

もとに、2022 年 9 月～2023 年 3 月、対象者の希望に合わせ、A 大学研究室での対面、または自宅通信によるオンラインでの半構造化・回顧的インタビューを実施した。インタビューは、対象者の同意を得て画像と音声で記録した。質問は、子どもの就学前からインタビュー当時までのスポーツ参加とその背景について、特にスポーツの参加・不参加の理由となった出来事と対応に焦点を絞りながら、対象者の話に合わせて順番や聞き方を変えて実施した。インタビューの所要時間は、それぞれ 2 時間程度であった。尚、対象者 B は、対象者 C と D（当事者で姉妹）の母親であり、C と D の不安を取り除きながら親子間で回答の確認（やりとり）をする環境を作るため、3 名のインタビューは同時に実施した。

3. 分析方法

分析はグラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 GTA とする）を用いて質的に行った。GTA は、「データに根ざした中範囲理論の構築を目指す、帰納的なデータ収集・分析に関する系統的なガイドライン」（抱井, 2015）である。GTA の特徴は、データの切片化により客観性を担保し、「データ収集と分析の同時進行」と「理論的サンプリング」から帰納法と演繹法のサイクルを繰り返しながら、個人間や出来事、カテゴリーなどを継続的に比較して分析し、構造化した理論構築を目指すことである（抱井, 2015）。GTA には複数のバージョンが存在するが、本研究ではストラウス版 GTA の流れを汲む戈木クレイグヒル版 GTA（戈木, 2017, 2021）を採用した。

その理由として、まず本研究では、発達障害児・者のスポーツ参加における障壁と対応の社会的相互作用を把握しながら、最終的に当事者や家族がどのようなスポーツ参加の形を選択しているのかを明らかにすることを目指しているため、「シンボリック相互作用論」の背景を持つストラ

ウス版¹（戈木, 2014；抱井, 2015）の流れを汲む戈木クレイグヒル版 GTA を選択することは、データに含まれる現象の構造とプロセスを明確にするために妥当であると考えた。次に、批判的な意見（木下, 2001）も存在する「切片化」について、本研究では、障壁と対応について多角的に検討し解釈するにあたり、重要な情報を見落とす可能性を低くし、且つ客観的に分析する（戈木, 2021）ために切片化は重要であると判断した。特に、本研究の調査者は対象者と X スポーツ教室を通じた機縁的關係があることから、「研究者がデータから距離を置くために行われる」切片化は、本研究で必要であると考えた。さらに、戈木クレイグヒル版の特徴である「カテゴリー関連図」は、カテゴリー間の結びつきによってその現象がどのように成り立つのか（戈木, 2021）を示すことができ、本研究の目的である障壁と対応の関連性（相互作用）を可視化し、確認するために必要であると考えた。

分析の流れは、まずインタビューデータを逐語化し、内容を読み込んだ後、文脈や意味をもとに切片化した（切片の大きさは各部分のデータ内容によって異なる）。次に、それぞれの切片データに含まれる特性（プロパティ）と次元（ディメンション）を抽出し、それらをもとにラベルを命名した。そして、ラベルの特性と次元、元データを見直しながら類似したラベルをカテゴリーにまとめ、カテゴリー名を生成した。最後に、カテゴリー同士を関連付けて現象を捉え、関連図とストーリーラインを作成した。得られたカテゴリーの統合を繰り返し、統合関連図を作成した。これらの分析過程は 2 名の調査者間でインタビューの逐語録、分析ファイル、データの解釈、カテゴリーの生成や関連図について共有し、意見を交換しながら同意を得るまで繰り返し、適合性を確認した。

尚、上述したとおり、GTA ではインタビューデータの分析を進めながら、その結果をもとに次の

¹ 戈木（2014）は、「グラウンデッド・セオリー・アプローチでは、ひとまとまりの社会的現象について、社会や他者との相互作用のなかでその人が自分の経験をどう意味づけるのか、どう感じるのか、そしてそれに基づいてどう行動するのかを複数のカテゴリー（またはカテゴリーとサブカテゴリー）を使って包括的に捉える」と述べている。

インタビューを実施し、データの収集と分析を同時に進める。本研究では、対象者 A・B・C・D のインタビュー終了後に分析を開始し、その結果を鑑みて、対象者 E・F・G のインタビューデータを収集、分析した。比較分析をしながらカテゴリーを整理し、本研究における現象の統合関連図とストーリーラインの作成に至っているが、理論的サンプリングの不足により「理論的飽和」までは迫り着いていないと判断し、今後の理論構築につなげるための資料とした。論文執筆においては、先行研究論文（橋爪, 2012；樋野ほか, 2018；武・堤, 2020；永井ほか, 2022；杉山・澤江, 2024）を参照した。

4. 倫理的配慮

本調査は、筆頭著者の所属機関研究倫理委員会の承認を得て実施された（承認番号 22077）。対象者には、調査の目的と方法、個人情報や得られたデータの管理方法と保管期間、成果発表の方法について口頭と文書で説明し、同意書へのサイン・捺印をもって自由意志による調査協力の承諾を得た。

Ⅲ. 結果

分析の結果、表 2 のとおり、中心となるカテゴリー【地域・学校でのスポーツ活動機会の獲得】と、関連する 12 個のサブカテゴリー²が生成され、発達障害児・者のスポーツ参加について 3 つの選択プロセスが確認できた。統合関連図（図 1）は、「状況」「行為/相互行為」「帰結」に属する各カテゴリーでプロセスを図示するものであり、中心となるカテゴリーは【 】、関連するサブカテゴリーは《 》、カテゴリーを関連づけるプロパティを太字、ディメンションは並字で示し、インタビューデータから確認できないディメンションには「？」を付した。また、データには含まれないが推測できるカテゴリーと関連は破線で示した。以下、3 つの選択プロセスについてカテゴリーと代表的なテキスト（「」斜体）を例示して説明する。

尚、テキストは、複数の切片をつなげて示している場合もあり、補足する目的で著者が（ ）内を追記するとともに、重複している言葉や間投詞（例：「あの」「で」「うん」等）の一部を削除した。また固有名詞や名前は伏字にし、長いテキストは（略）を用いて示した。

1. スポーツ参加の諦めと活動の限定に至るプロセス

発達障害のある子どもは、その障害特性、例えば顕著な多動行動や注意欠如、物事や勝敗への強いこだわり、対人関係の苦手さ、不器用さなどにより、日常生活や学校生活での困難さや、障害を理解してもらえないもどかしさを経験しており、

「本人がやっぱ抽象的なことがすごく苦手なのと、なんとなく言葉で喋ったりするので、あまり障害の面で理解がされなかったんですよね (G)」

などと語っている。

そのような状況の中で、家族（母親や祖父母）は子どもが幼少期の頃に《公園の利用》を試みている。そこで他の子どもや親同士の交流ができれば地域活動につながるかもしれないが、実際は多動の子どもを発散させる目的に留まったり、他の子どもとの交流を避けたり、他の親に対する不安や走り回る子どもの面倒を見る大変さといった、家族の不安感・負担感が増しており、

「本当に人のいない公園を選択して（略）。他の子と同じペースで遊べないので、やっぱほぼ必然的に人がいないところで遊ばせるっていう感じにはなりましたね (B)」

などと語っていた。

同時に、地域でスポーツに参加する機会を求めるものの、障害を理由に参加や利用を断られたり、学校の授業や部活動での制度的な制限、近隣に通える場所がないといった物理的な制限、介助員に付いてもらえないなどの支援者の不足に加え、子ども自身のスポーツへの関心の低さや親の不安など、《スポーツに参加する困難さ》を経験して

² 戈木（2014）が、カテゴリー関連図を作成した時点で「現象の中心となっている 1 つだけがカテゴリー一、残りはサブカテゴリー」となると示していることを参考に整理した。

表 2. カテゴリー統合表

統合されたカテゴリー		代表的なテキスト
状 況	1. 発達障害の特徴と 困難さ	負けたりとか、そういうことで怒ったりっていうのがありましたね。負けると怒る。それでルールが分からないでやってて、これは違うよって言われて、また怒る (A)
		(人とかかわりの困難さは) 体育だけじゃなく、もう日々、日常生活で本当大変だったので、(略) 周りとの関係で上手く作れないので、行動がとびつというか、変わってるからなんだろう、弾かれちゃうというか集団に入っていけないっていうか (B)
		勝敗のこだわりは、何に関しても、やっぱり誰より先とか、いろんなことが全て直結してて、負けると負になるというか、あの人のにとっては (E)
		地域のコミュニティとかちっちゃい子が集まるようなところで、(略) 区でやってるようなところに連れて行く止まらない、他の子にぶつかっちゃっても謝れない (F)
2. 公園の利用	本人がやっぱり抽象的なことがすごく苦手なのと、なんとなく言葉で喋ったりするので、あまり障害の面で理解がされなかったんですね (G)	
	近くの公園とか連れてって遊んだことはあるんですけど、やっぱり私と二人っていう感じで、やっぱり誰かと遊ぶとか、そういうことをしなかったですかね (A)	
	本当に人のいない公園を選択して (略)。他の子と同じペースで遊べないので、やっぱりほぼ必然的に人がいないところで遊ばせるっていう感じにはなってましたね (B)	
	(公園に) 行ってはいたけど、中で遊ばず、公園の外をずっと走ってました (E)	
3. スポーツに参加する 困難さ	公園には行けども、誰かが一緒に砂場に来ちゃったりすると、(略) (子どもは) 無関心なので、もう声かけられてハッともないので、もうひたすら自分のやりたいことをやる感じなので、やっぱりお友達も、え？みたいな感じだし、お母さんもあれ？この子ちょっとって思ってると思うとちょっと、帰らなくなっちゃう (F)	
	公園に行ったり、どこかでお昼ご飯食べたりとか。そういうことぐらいはしてましたかね (G)	
	発達障害があることを話したら見れませんってやっぱり言われて (A) 中学の時の部活も (略) 支援級の先生は付くことはできないので、自分でやっぱり、一人で参加できて、一人で帰れることが条件だったかな (A)	
	普通の●●(スポーツ団体) とか、そういう運動のところには、一般のお子さんと一緒のところにはなかなか入れられないっていうのがあって (略) 一般のお子さんと一緒になっているのはちょっと躊躇しましたね (B)	
行 為 ／ 相 互 行 為	4. 少なくなる スポーツ参加	(地域の障害児・者を対象としたスポーツについて声かけをしても) 「やらない、行かない」って (E) 中学校は支援級 (の生徒は) プール使わせてもらえませんでした (E)
		スイミングに行かせなかったんです。でも断られちゃったの。(略) 「みんなと同じことができますか」みたいな感じで、「こちらとしては責任が持てないので」って言って断られちゃった (F)
		スイミングとかもありますよね。それとかもやっぱりちょっと物理的に通えない距離だったっていうのとかかな (G) (特別支援学校の課外活動参加について) 帰だけ迎えに来るからお願いできないかっていうことを頼んだんですけど、条件としてはそれがのめないと絶対駄目だって言われたんで (G)
		一緒に何かして遊ぶっていうのは、なんか、あんまり。まあ何て言うんですかね。やらなかったっていうか、してなかったかな (A)
5. スポーツをしたい・ させたい想いの持続	5. スポーツをしたい・ させたい想いの持続	(バドミントン部は) ちょっとラリーして終わりぐらいがすごい簡単なやつだったと思う (C) 時間も短かったしね (B) (部活動の希望について) 全然運動ものに自分の名前のマグネット付けなかったから (D)
		(体育の交流級は) 特に私も考えてなかったですし、本人も行きたいとは言わなかったですね (E)
		公園すら行かれなくなっちゃったんです (F) (スイミングで断られた) 前例があったので、やっぱりちょっとなかなか、行かれなかったの (F)
		(陸上部の練習に) 行ってみて、でも「無理」ってなりました (G)
6. 親が探す・交渉する 参加機会	6. 親が探す・交渉する 参加機会	やっぱり最初の頃は、あのまあ、今もそうですけど、やっぱり体動かしたりする、体力づくりっていうのは、なんか体を動かしたり、スポーツしたりとか、やっぱりそういう (体を動かせる) 場所が欲しかったって思っていて (A)
		(子ども) を発散させたっていう (B)
		やっぱり何か学校以外で関わりを、何か持てたらなっていうのと、あと、体を動かすことができたらなっていうのは思ってた (E)
		サッカーとか野球とかっていうのはそれこそ、うん、普通の子だったら私はやらせたかったんですね (F)
		本人は割と、運動神経は割といい方だと思ってるんで、知的の割には多分動けるはずだと思ってたので、なんかやらしてあげたいってずっと思ってたので (G)
		あんまり私が積極的じゃなかったって感じですかね？ (子どもに) 「これがあるから行ってみよう」とか、そういうことをしなかったから行ったことがないっていう感じで (A)
		療育のときにDと一緒にプール入ったり、あと中学校まではなんだけあそこ、スイミングスクールと一緒に (B) (スペシャルオリンピックスの参加に) ちょっと興味あって調べたりしたんですけど、会場が遠かったり、結局、そのまんま参加するってことまではしなかったですね (B)
		(地域のスポーツ、水泳教室などへの申し込み) はないです (E)
		(市のスポーツ活動への参加申込みに) 行きましたね。(略) もう断られるかもしれないっていうのはもう前提で話してるのではないんですけど、もしかして行けるかもぐらいの感覚で (F)
		いろいろ探しました。本当に探しました。いろいろと探しました (G)

表 2. カテゴリー統合表（続き）

統合されたカテゴリー		代表的なテキスト
7. 療育などでの活動の利用		やっぱり同じ障害を持ってるお母さんたちと出会って、（略）（他の親と子ども）とも出会って。（略）そこで出会った友達がきっかけで、（略）●●（Xスポーツ教室）っていうのあるんですよって教えてもらって（A）
		（療育には）PTがあって、機能訓練は中学校までね、週に1回とかずつと受けてたので。ただやっぱり中学まで、高校になったらもう頻度がぐっと月1回とかに減らされちゃうので（B） ●さんに声かけられて、あっそういえばと（Xスポーツ教室を）思い出して。（略）そういうお仲間のママさんたちと繋がりがかったっていうのもあって（B）
		療育と●●（Xスポーツ教室）は、なかったら今の私はないと思います（E）
		週に2週間とか1週間に1回とかっていう療育だと、もう無理だと思って（F） どうしても運動をさせたいのと、そういう理解ある人が周りにいなかったの、（運動特化型放課後デイサービスに）通いました結構（G）
8. 家族・自分で作るスポーツ参加機会		兄はサッカーしてたので、サッカーの試合観に行ったりとか、応援に行ったりとか（A）
		この子たちがちっちゃいときにスキーに行こうと誘われたりはしたんですけど、二人を連れてスキーの支度持てとか、考えるともうなんか、行く元気がなくなっちゃって（B）
		空いてるときに、どっか遊び行ったりとか、そういう走れそうなこととか公園とか。一緒に走ったり、お散歩行ったりとかはしてたと思います（E）
		土日とかで主人がいるときは、思いっきり走れるようなところに連れてってもらったりとか、小さいときからスキーはやらせようと思ってたので、冬になったら、スキーには2歳ぐらいに2歳の後半ぐらいから（略）（F） （スペシャルオリンピックスの活動を）家族でもやるようになったので一緒に家族もサポートしながら、みんなで行って（G）
行 為 ／ 相 互 行 為	【地域・学校での スポーツ活動機会の獲得】 （コアカテゴリー）	幸い、小さい時に●●（Xスポーツ教室）に出会って、入ることができて（A） （特別支援学校の担任の先生が）すごく走りが上手く上手くなったって褒めてくれて、（略）手の振り方とか、そういうの教えたんですよって話をしてから、あーなるほど、それがきっかけなんだって（A） 学生コーチがお手本を見せて見せてくれるのがよかった（A）
		一番マッチしたのがXスポーツクラブだったしね（B） 日曜日の、その肢体障害児の枠が、午後の一時からだったから、お腹いっぱいだしね。なかなかちよっと。うちがいけない枠が結構空いちゃって、でそこに入りたい人もいるからっていうんで、そのプールのコーチからそんなに来ないんだたらやめてくださいって言われちゃって（B） （自治体の障害者スポーツイベントなどは）結局参加してる方が、年上の人ばかりで、なんかあんまり、楽しくない、全然たのしそじゃなかったんですよ（B）
		先生からいろいろと教えていたんで、なわとびとかも、自分は無意識で多分子供のときやったと思うんですけど、でも先生が、腕と足のその動きが違うからなわとびは難しいんだっておっしゃってくださって（E） （部活動に）地域の指導員の方が来てくれるようになったんです。その先生にも（子ども）の特徴を新しい顧問の先生が説明をしてくれて、（略）その指導員の先生が、「そんなのみんな一緒だよ」みたいな感じで、結構受け入れてくれて、（地域の剣道教室にも）おいでって言ってくれて（F）
		スペシャルオリンピックスって。そののテニスに行き始めたんですよ。で、やっぱり運動をずっと探していて、何かできないかなってずっと思ってたんですけど（略）スペシャルオリンピックスを探してテニスに（地域名）土曜日に通ってました（G）
9. アダプテッドされた環境でのスポーツの経験		学校でやったことを●●（Xスポーツ教室）で練習して、また学校でやった時にできていてと、先生からも「できるようになったね」と声をかけられて（A） 「あ、それこの前やったの。●●（Xスポーツ教室）でやったやつじゃない」とかいうと「うん」とかいうから、「あーちゃんと覚えてるんだなあ」と思って。だからそこは「真面目だなあ」とか思いながら。「でもあーいいなあって、ちゃんと覚えていいな」って思ってた（A） やっぱり同じようなこう障害を持ったお母さん達とつながれるのは、やっぱり（Xスポーツ教室）の人たちかなって（A）
		●●（Xスポーツ教室）の人数もどんどん入ってきたっていうところでやりにくくなってきたっていうのもある（B） この人たちのモチベーションが下がったのと、私の体調が悪かったのもあって、それが一番大きいですか。（B） おばちゃん引退した方がいいのよ（C）
		あの娘が跳び箱とか、7段とか飛べたんですね。今多分もう、飛べないと思うんですけど、すごいなあっていうふうには見ては思っていました（E） 本人に聞いたらやっぱり女の子（略）が来なくなったっていうのと（E） （コロナの影響で）活動しなくて家で過ごす時間の方が、もしかしたらその動画見るのが楽しくなったら、こっちの時間の方が楽しいから、やっぱりさばることも覚えてきて、面倒くさいっていうこともあるみたい（E）
		すごく皆さんが理解してくれて、それで、結局（剣道の）2級は取れなかったんだけど、3年生の終わりに3級をとって（F） 理解のある人たちが多く中で、何かホームラン打っても「うまい、うまい」みたいな感じで「そっちじゃないー」みたいな感じで。「それをこっちに向けていいねー」みたいな感じで。やっぱり教えるの上手なんで。そこでこういう安心して見れる環境もあるんだなってやっぱり思いました（G）
10. スポーツ参加の諦めと活動の限定		もうでも当時は●●（Xスポーツ教室）に入ってたんで、まあここに通えるからいいわと思って。他にも行きましようとか探そうとかは、もうそっから思わなかったんですよ（A） 部活は考えなかったです。けど、もう無理かな、ついていけないかなっていう感じですかね（A） （卒業後は）ますます運動はなくなっちゃったよね。そうですね運動らしきはその犬の散歩ぐらいですかね（B）
		でもまあ、体操（Xスポーツ教室）あるからいいかって（E）
		もう諦めたんですよ。（略）スイミングはもう本当諦めました（F）
		でも今土曜日が仕事なので、もう仕事始まってからずっと行けてないんで。（略）せっかくね、テニスやってたからテニスをやりたいんですけど、やっぱり相手もいないといけないですしね。その曜日にちょっと行けないので（G）
結 婚	11. 日常でのスポーツ参加の継続	（子ども）は楽しんでたから、続けてこれたかなって（A） 地域の運動会とか、そういうのはもうフル参戦です（F） 次のステップは今度ボルダリングだったんですけど思ってたんですけど（G） 本人たちがもう全然やる気がないので、私がいくらお尻を叩いてもどうにかなる年齢じゃなくなっちゃったっていう感じです（B） 彼女にとっては卒業しちゃったのかとかちよっと思いながら。もうだから彼女はやり尽くしたのかなって。●●（Xスポーツ教室）自体をと。満足したのか（E）
		部活は、スポーツはもうやらないうって決めて。剣道もきっぱりやめて（略）。すっぱりですもう。3級を取った時点で終わりです（子ども）は。目標がそこだったので（F） 音楽に合わせてやったりとか、あとその発表会に出たんで、もうそれで何かいい経験できたっていう感じで（G）
12. スポーツからの離脱の受容		

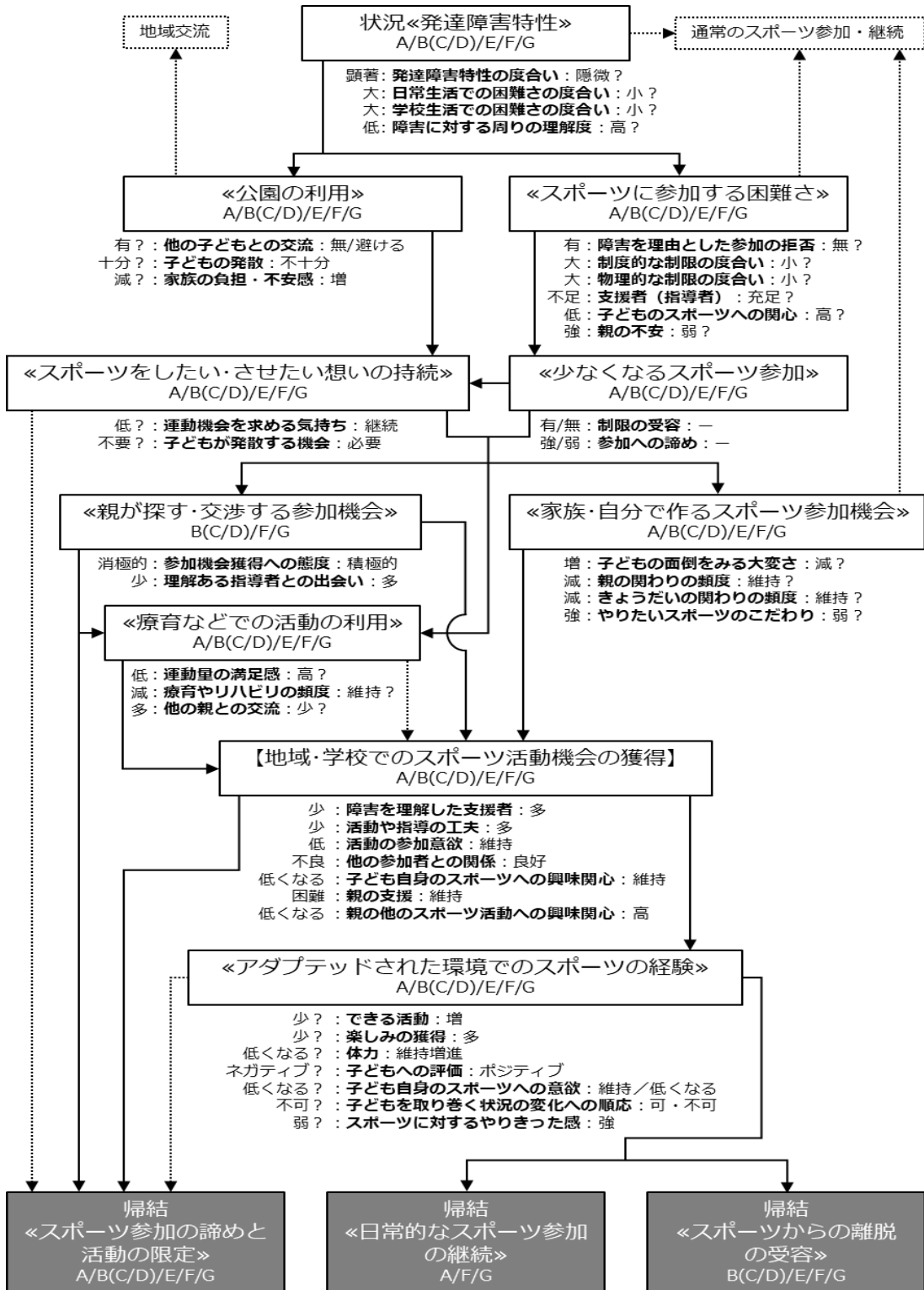


図1. 【地域・学校でのスポーツ活動機会の獲得】という現象に関わるカテゴリー統合関連図

ており、

「スイミングに行かせたかったんです。でも断られちゃったの。(略)『みんなと同じことができますか』みたいな感じで、『こちらとしては責任が持てないので』って言って断られちゃった (F)」

などと語っている。そして、このような経験は、発達障害のある子どもの《少なくなるスポーツ参加》につながり、

「(スイミングで断られた) 前例があったので、やっぱりちょっとなかなか、行かれなかったの (F)」

などと語っている。

このような状況の中で、スポーツの機会を求める気持ちや必要性が低ければ、そのままスポーツに参加する機会を諦めてしまう可能性があるが、実際は子どもや親には《スポーツをしたい・させたい想いの持続》があり、

「やっぱり何か学校以外で関わりを、何か持てたらなっているのと、あと、体を動かすことができたらなっているのは思って (E)」

などと語っている。

同時に、発達障害のある子どもは自分でスポーツ参加の機会を獲得することは難しく、親が子どもの参加できるスポーツ活動の獲得に積極的に行動する《親が探す・交渉する参加機会》について、

「いろいろ探しました。本当に探しました。

いろいろと探しました (G)」

と語るように、遠方の地域まで行動範囲を広げて子どもが参加できるスポーツ教室を探していた。そして、参加できた学校の部活動や地域のスポーツ教室で障害に理解ある指導者や支援者と出会い、

「(部活動に) 地域の指導員の方が来てくれるようになったんです。その先生にも (子ども) の特徴を新しい顧問の先生が説明をしてくれて、(略) その指導員の先生が、『そんなのみんな一緒だよ』みたいな感じで、結構受け入れてくれて、(地域の剣道教室にも) おいでって言うてくれて (F)」

と語るような、【地域・学校でのスポーツ活動機

会の獲得】につながっていた。

一方で、過去の経験から親が消極的になり、子どもがスポーツに参加する機会が少なくなる可能性があり、

「部活は考えなかったです。けど、もう無理かな、ついていけないかなって感じですかね (A)」

と語るような《スポーツ参加の諦めと活動の限定》につながっていた。

また、《療育などでの活動の利用》を通じて、子どもの運動機会を獲得しようとするものの、制度上その頻度は子どもが成長すると減少する傾向にあり、満足度も低くなる。そのような状況の中、

「やっぱり同じ障害を持ってるお母さんたちと出会って、(略) (他の親と子ども) とも出会って。(略) そこで出会った友達がきっかけで、(略) ●● (Xスポーツ教室) っていうのあるんですよって教えてもらって (A)」

といった、同じ障害がある子どもを持つ他の親との交流や情報交換から、発達障害を対象とするスポーツ教室など、【地域・学校でのスポーツ活動機会の獲得】につながっていた。同時に、家族でスポーツを行ったり、きょうだいのスポーツ活動を観に行ったりして《家族・自分で作るスポーツ参加機会》を作り、

「(スペシャルオリンピックスの活動を) 家族でもやるようになったので一緒に家族もサポートしながら、みんなで行って (G)」

などと語っている。

子どもの成長に伴い、親やきょうだいのかわりが減少していき、地域で見つけることができたスポーツ活動に期待を寄せるようになるが、参加できたとしても、環境が十分でなかったり、ニーズと適合せずに満足度が低くなったり、他の参加者との関係がうまく構築できず、子どもの活動への参加意欲やスポーツへの興味関心が低くなってしまう状況があり、

「(自治体の障害者スポーツイベントなどは) 結局参加してる方が、年上の人ばかりで、なんかあんまり、楽しくない、全然楽しそうじゃなかったんですよ。(B)」

などと語っている。

加えて、場所が遠くて通えなくなったり、送迎などの親の支援が困難になったりして、参加しているスポーツの継続を諦めざるを得なかったり、

「もうでも当時は●●(X スポーツ教室)に入ってたんで、まあここに通えるからいいわと思って。他にも行きましようとか探そうとかは、もうそっから思わなかったんですよ(A)」

と語るように、ひとつのスポーツ教室の参加が他の地域スポーツ活動に繋がらない《スポーツの参加の諦めと活動の限定》という選択に至っていた。

2. 日常的なスポーツ参加の継続に至るプロセス

上述したような《発達障害特性》があり、《スポーツに参加する困難さ》や《少なくなるスポーツ参加》を経験する中で、《スポーツをしたい・させたい想いの持続》から、親や本人の積極的な行動や、療育での情報交換で獲得した学校・地域でのスポーツ活動において、発達障害に関する知識やスキルをもつ指導者や支援者により、活動や指導の工夫がなされ、子どもの参加意欲や他者との関係性が構築されていくと、《アダプテッドされた環境でのスポーツの経験》の中で、参加者はできる活動が増えたり、楽しみを獲得したり、体力の維持増進やスポーツに対する興味関心の維持につながり、

「学校でやったことを、●●(X スポーツ教室)で練習して、また学校でやった時にできていると、先生からも『できるようになったね』と声をかけられて(A)」

「理解のある人たちが多く中で、何か(テニスで)ホームラン打っても『うまい、うまい』みたいな感じで(略)『そっちじゃない』みたいな感じで。(略)やっぱ教えるの上手なんで。そこでこういう安心して見れる環境もあるんだなってやっぱり思いました(G)」

などと語っている。そして、親の子どもに対する認識もポジティブになっていき、

「『あ、それこの前やったの。●●(X スポーツ教室)でやってたやつじゃない』とか

いうと『うん』とか言うから、『あー、ちゃんと覚えてるんだなあ』と思って。だからそこは『真面目だなあ』とか思いながら。

でも『ああいいなあって、ちゃんと覚えてていいな』って思って(A)」

と、子どものできることを認識するようになったことを語っていた。そして、

「(子ども)は楽しんでたから、続けてこれたかなって(A)」

と語るように、X スポーツ教室の継続とともに、教室以外でも日常的にスポーツを実践したり、新しいスポーツに関心を持ったりする《日常的なスポーツ参加の継続》の選択に至っていた。

3. スポーツからの離脱の受容に至るプロセス

《アダプテッドされた環境でのスポーツの経験》は、発達障害のある子どもと親にもうひとつのプロセスをもたらしていた。アダプテッドされた環境でスポーツ参加の機会を獲得し、多様な活動を行い、子どもも親も楽しさを得て、活動への満足感が高くなる一方で、X スポーツ教室の参加人数が増加したり、同性の参加者がいなくなったり、学生コーチとの年齢差が大きくなるなどの変化にうまく対応できない場合があり、

「●●(X スポーツ教室)の人数もどんどん入ってきたっていうところでやりにくくなってきたっていうのもある(B)」

「本人に聞いたらやっぱり女の子(略)が来なくなったっていうのと(E)」

「おばちゃん引退した方がいいのよ(C)」

などと語っている。

また、子ども自身が他に楽しい活動ができずスポーツへの興味関心が低くなったり、本人の就労や親の体調不良など、子どもを取り巻く環境の変化が、本人の意欲の喪失と合わさり、スポーツ教室を退会したり、スポーツ活動から離れる選択をする場合があり、

「でも今土曜日が仕事なので、もう仕事始まってからずっと行けてないんで(G)」

などと語っている。

しかし、スポーツから離れる選択をする場合

でも、アダプテッドされたスポーツ環境でなにかを成し遂げる経験をしていると、子どもと親はスポーツに対するやり切った感を強く感じており、

「部活は、スポーツはもうやらないって決めて。剣道もきっぱりやめて (略)。すっぱりですもう。3 級を取った時点で終わりです (子ども) は。目標がそこだったので (F)」
「音楽に合わせてやったりとか、あとその発表会に出たんで、もうそれで何かいい経験できたっていう感じで (G)」

などと語っている。

また親も、障壁と対応を経験する中で、アダプテッドされた環境でスポーツに参加する子どもの姿を見ながら、子どものスポーツ参加に対する想いの変容と整理を経験しており、

「彼女にとっては卒業しちゃったのかなとかちょっと思いながら。もうだから彼女はやり尽くしたのかなって。●● (X スポーツ教室) 自体をと。満足したのかな (E)」

と語った。このような、アダプテッドされた環境でのスポーツ経験がもたらす相互作用が「スポーツからの卒業」というテキストに表されるような《スポーツからの離脱の受容》、すなわち、スポーツをやらない、または特定のスポーツ活動を辞めるという選択に対して、本人も親も納得し、新たな歩みを進める選択に至っていた。

IV. 考察

GTA は、導き出したアウトカムをもとに、その現象が起こる実践環境で応用し、改善につなげていく可能性が高いものである (戈木, 2021)。このことを踏まえ、本研究で明らかになった結果から、発達障害児・者のスポーツ参加における障壁に対する地域での対策に着目し考察する。

1. 発達障害児・者の居場所づくり

公園は、幼少期の子どものスポーツ環境として、また子ども同士、親同士の社会的交流の場として大切な場所である。本研究では、その公園の利用が制限されるような現状が示された。発達障害のある子どもと親が利用しやすい公園の存在はその障壁への対策のひとつであろう。近年、「都

市公園の移動等円滑化整備ガイドライン」に基づいたインクルーシブ公園の設置が推進されている (赤松, 2023)。国内外の事例から、インクルーシブ公園は「遊ぶ機会を通じて障害による偏見を取り除き、相互理解を深める場の創出に貢献」でき、「だれもが自分の力を発揮して遊べ、お互いの違いや共通点を認め合いながらともに成長している様子が確認」できる場であると報告されている (赤松, 2023)。一方で、国内のインクルーシブ公園の整備はまだ少なく、コスト面、管理面、安全面の課題が存在するとともに、幅広い障害特性を鑑みたすべての子どもが満足できる場所を整備する困難さも指摘されている (赤松, 2024)。インクルーシブ公園の設置や事例を増やす自治体の取り組みに期待するとともに、発達障害児の親子が既存の公園を安心して利用できるようにするための障害理解環境も重要であろう。

本研究では、障害を理由に活動の参加を断られたり、参加を躊躇したりするという障壁が存在することが示された。塩田・徳井 (2016) らは、特別支援学校に通学する幼児・児童・生徒のレクリエーション・スポーツ参加を阻害する要因として、「障害に適したものがない」が最も大きいことを報告している。発達障害の特徴に適したスポーツ活動や教室の実践も報告されているが (吉澤・藤沼, 2022)、そのような場所はまだまだ少ないのが現状である。本研究でも、障害児・者を対象としたクラスの枠が少なく、参加しづらい現状も確認された。

身近な地域でのスポーツ活動の機会につながる場所として重要な役割を担うのが学校の部活動であるが、本研究では、学校の運動部活動参加の条件が障壁のひとつとして示唆された。全国特別支援学校長会の調査 (2024) によると、小学部の 9.4%、中学部の 45.1%、高等部の 92.7% に、運動部またはスポーツを主体とした部活動があると報告されているが、参加できる生徒が限定されている可能性もある。特別支援学校に通う子どもを持つ保護者を対象とした調査では、学校からのレクリエーション・スポーツの促進に向けた支援を「受けたことがない」と回答した割合は 30.8% であり、イベントや教室の情報提供を受けた割合

は 45.3%となっているが、教育を主とする学校では、放課後や課外活動での支援までは難しい(塩田・徳井, 2016)。

用具や器具の確保、指導の人材と時間の確保、安全性の確保など、特別支援学校の運動部活動を充実させる課題は兼ねてより指摘されており、2023 年度から取り組みが始まった、公立中学校の休日の運動部活動の地域移行には「特別支援学校中等部」も含まれているが、実態や事例の検討は十分ではない(河西, 2023)とされている。実際、全国特別支援学校長会の調査(2024)では「児童生徒の居住地域総合型スポーツクラブと連携を取っている」と回答している割合は小学部で 12.5%、中学部で 33.3%、高等部で 52.1%となっている。また、インクルーシブ教育が推進される中、通常学校でも特別な配慮が必要な生徒が参加できる運動部活動の存在が求められるが、中学校・高等学校で部活動(運動部・文化部)に所属する生徒の割合は 4 割以下である(株式会社リベルタス・コンサルティング, 2025)。運動部活動の地域移行における特別な配慮が必要な生徒の参加機会に関しても、十分に検討されているとは言いがたい。

本研究では、「一人で参加できる」という部活動参加の条件が障壁になっていることが示された。綿引(2011)は、知的障害特別支援学校の卒業生を対象とした調査で、在学していた学校でスポーツに参加できることにより、卒業後のスポーツの継続につながることを明らかにし、「通いながれた場所(学校)」での活動が障害者の生涯スポーツと関連すると述べている。学校でのスポーツ経験がその後のスポーツ参加に影響することをふまえると、参加条件の緩和を検討し、より多くの児童生徒が学校で運動部活動に参加できる環境の構築が望まれるとともに、地域移行による運動部活動の場所が「通いながれた場所」になるよう、学校と地域の連携による工夫の必要性がより増していると考えられる。

2. 発達障害児・者のスポーツと支援者

本研究では、発達障害児・者のスポーツ参加に関わる障壁の対応として、障害を理解し、受け

入れる支援者の存在が示唆された。これは、杉山・澤江(2024)が示す「受容的な他者行動によって、他者と運動・スポーツを楽しむことができ、重要な他者が運動・スポーツをやってみたいという気持ちを支えている」という、自閉スペクトラム症当事者を対象とした結果を支持するものである。中でも指導者は、障壁を解消するための中核的存在であろう。スポーツ庁(2025)の「障害者スポーツ推進プロジェクト」の中では、「障害者スポーツ指導の基本であるアダプテッド体育・スポーツの視点」が地域の通常の小中高等学校の体育現場で定着することを目指した研修会の開催に取り組んでいる。このような研修会に、特別支援学校を含む小・中・高等学校の教職員や地域のスポーツ指導者が継続的に参加できることで、スポーツ指導現場での「重要な他者」(杉山・澤江, 2024)の増加につながるのではないだろうか。

例えば本研究では、教え方が発達障害児・者のスポーツの継続や参加の意欲につながることを確認できた。

「何か正解を教えてくれるような先生、何か例えばよくあるのが、『走らないよ』っていうのじゃなくて『歩きましょう』っていう、そういう提示の仕方が上手な先生だと、本人も納得して。わかりやすいっていうんですね。やっぱ抽象的に怒られるっていう感じ、大きな声とか強い口調みたいのがすごいやっぱ苦手なんで、なんか、『これが駄目』っていうんじゃないくて『こうしようね』みたいな感じで言われるとすごいスムーズに入ってきたので、それができて先生にはすごいやっぱり、今でも好きだったりします。(G)」

などという語りのように、指導者のスキルは発達障害児・者がスポーツに楽しく参加できる要因のひとつである。地域スポーツの指導者は、特別な配慮が必要な子どもへの指導に困難さを感じることも事実であり(藤後ほか, 2022)、指導者自身が障壁となる可能性もある。そのような障壁を解消するためにも、研修会などへの参加の推奨は重要であろう。

また、本研究では、指導者と子どもとの関係性

がスポーツ参加に影響することも示唆された。例えば、

『『ちゃん』って、コーチたちが親しみを込めて呼んでくれるんだけど、本人たちしてみると、自分よりも年が下の人（学生コーチ）にね「ちゃん付け」で呼ばれるっていうのがちょっとって思うところもあったんだって（略）。（A）』

という語りにあるように、知的発達障害のある人が実年齢よりも低い年齢として認識されることに対する不快感について指導者は理解し、指導・支援する必要があるだろう。

さらに、地域ぐるみのかかわりも大切である。対象者のひとり、子どもが地域で受け入れてもらえるように、近隣に子どもの特徴を話してまわったり、地域の運動会や納涼会などには必ず参加して子どものことを地域で覚えてもらえるようにしていた。結果、

「（子どもは地域の運動会に）行く行くって。応援するのも楽しいし、（略）それはもう本当に田舎の運動会なので、皆さん、受け入れはよくて、やっぱり理解してもらってというのがなかなか難しいので、そこさえクリアしてしまうと、多分、かなりハードルが低くなるというか（F）」

と語っているように、地域でのスポーツ参加につながっている。地域ぐるみで子どもを見守るのは障害の有無にかかわらず求められることである。そのような環境が結果的に障害のある子どもを理解していくプロセスとしても重要な役割を果たすのではないだろうか。

3. 発達障害のある子どものスポーツに対する親の気持ちの整理と受容

本研究では、子どものスポーツ参加の選択プロセスと親のかかわりの関連性が確認できた。直面する様々な障壁に子どもと共に対応していくプロセスで変化する親の気持ち、特に、子どもの能力を認め、できたことを認識し、最終的に子どもがスポーツから離脱することを受容するという現象は、発達障害児・者のスポーツ参加の在り方として新しい知見であった。上川（2020）は、発

達障害のある子どもをもつ親が障害を受け入れていく過程に関する文献研究から、発達障害のある子どもを持つ親には、子どもの障害の受容に至るまでに子どもに対する肯定的な気持ちと否定的な気持ちが繰り返し現れる現象があるとし、日常の些細な出来事や、第三者からの何気ない発言をきっかけに障害が認識されると述べている。発達障害があることでスポーツ参加が制限される経験は、子どもの障害を認識し、ネガティブな気持ちになる原因になるだろう。一方で、発達障害の特徴に合わせた環境でスポーツを経験する中でできることが増え、楽しさを得ている子どもを見ることは、親の子どもに対する認識と気持ちをポジティブなものにすると考える。

上田（2020）は、「障害の受容とはあらかじめでも居直りでもなく、障害に対する価値観（感）の転換であり、障害をもつことが自己の全体としての人間的価値を低下させるものではないことの認識と体得を通じて、恥の意識や劣等感を克服し、積極的な生活態度に転ずることである」と定義している。スポーツは、この「価値観の転換」に大きく寄与する可能性がある。例えば、

「みんなと違う、みんなのレベルに追いついていかれない、走っても遅いし、ボール投げても飛ばないし、（略）ちょっと悔しいというか、ちょっと馬鹿にして『●●下手くそ』とか言われるじゃないですか。それもちょうど嫌だったとか。（F）」

という語りのように、体育を含むスポーツ活動は「恥の意識や劣等感」を抱きやすい環境であり、発達障害のある子どもが多く経験する。しかし、発達障害の特徴に合わせた環境で成功体験を重ねると、「恥の意識や劣等感を克服し、積極的な生活態度に転ずる」という価値観の転換につながるのではないだろうか。また、発達障害のある子どもをもつ親は、「子どものがんばりの認知」、「子どもとの連帯感」が、子どもを育てる中でのレジリエンスにつながるとされる（鈴木ほか、2015）。本研究では、スポーツに取り組む子どもを見て子どものがんばりを認識したり、子どもと共にスポーツを楽しむ連帯感が生まれたりする様子が見えがえた。そのような現象は、子どものスポーツ参

加に対する親の態度を積極的なものに変え、子どものスポーツ参加選択のプロセスに影響を与えると考ええる。

さらに本研究では、療育などで知り合った親からスポーツ教室の情報を得ることや、スポーツ教室での親同士の交流が、子どものスポーツ参加の選択に関連していることが示唆された。障害のある子どもをもつ母親は、親の会や母親仲間との関わりを通じて心理的エンパワメントや居場所を獲得する（林・伊藤・早川，2002；石橋・中込，2014）。本研究の対象者のひとは、

「やっぱり療育訓練とか、そういうところいろんな方と知り合ってこういう子もいるんだっていうので。ありがたかったですね。人との繋がりも持ってたし。それがなかったら、ちょっと、かなり。本当に、療育と●●(Xスポーツ教室)は、なかったら今の私はないと思います。(E)」

と語っている。レスパイトを含め、家族への支援も、発達障害のある子どものスポーツ参加における障壁を解消する取り組みとして重要な視点であることを忘れてはならない。

V. 結語

本研究は、発達障害児・者のスポーツ参加における選択プロセスを、障壁と対応の関連現象をもとに当事者と保護者の視点から質的に明らかにすることを目的とした。GTAを用いた分析の結果、3つの選択プロセスが確認でき、それぞれのプロセスにおける障壁と対応の事例から、地域での対策について考察した。

2024年4月1日に「改正障害者差別解消法」が施行され、合理的配慮が義務化される中、障害を理由としたスポーツ参加の制限が解消されていくことが期待されるが、現状では多くの障壁が存在する。本研究では、発達障害児・者のスポーツ参加に関わる、身近な地域に存在する具体的な障壁と、それらの障壁への当事者と家族の対応と選択から、障壁を解消するための地域での対策について検討することができた。特に、アダプテッドされたスポーツ環境での経験が、スポーツの継続のみならず、否定的に捉えられがちな「スポーツ

からの離脱」を、受容できる選択として捉えることができるという現象が導き出されたことは、発達障害児・者のスポーツのあり方として新しい視座を与えるものであった。

本研究は、発達障害児・者のスポーツ参加に関わる障壁を解消するための手立てとなる理論構築を目指すための資料として一定の知見を得ることができたが、理論的サンプリングの不足により理論的飽和には至っていない。今後は、理論的サンプリングを継続し、本研究では抽出できなかったカテゴリーやプロセスが存在するのかを確認し、理論的飽和を目指す必要がある。加えて、GTAでは理論を構築するために、Fit（適合性）、Work/Workability（有効性）、Relevance（有意性）、Modifiability（修正可能性）を検証する必要があるとされる（Weed，2009；抱井，2015）。今後は、本研究で導きだされたプロセス（パターン）の実践の場への適合性、また更なる修正の必要性について継続研究していくとともに、障壁に対して対策を講じ、その効果を検証する必要がある。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 21K11424 の助成を受けて実施しました。本研究にご協力いただいた対象者と関係者の皆さまに心より御礼申し上げます。

文献

- 阿部悟郎（2018）体育哲学—プロトレプティコス—。不昧堂出版：東京，pp. 103-137.
- 赤松瑞枝（2023）公園のインクルーシブ化の意義。跡見学園女子大学マネジメント学部紀要，35：23-37.
- 赤松瑞枝（2024）インクルーシブ公園整備の過程と留意点—埼玉県三郷市「なかよしひろば」を事例として—。跡見学園女子大学マネジメント学部紀要，37：51-71.
- アメリカ精神医学会：高橋三郎・大野裕監訳 染谷俊幸・神庭重信・尾崎紀夫・三村将・村井俊哉・中尾智博訳（2023）DSM-5-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル。医学書院：東京，pp. 35-97.

- 綾屋紗月 (2022) 自閉スペクトラム症の学生や研究者への合理的配慮と基礎的環境整備. 学術の動向, 27 (10) : 40-45.
- 藤田紀昭 (2008) 障害者スポーツの世界. 角川学芸出版 : 東京, pp. 17-24.
- 萩裕美子 (2001) 生涯スポーツ学の位置づけと方向性. 九州体育・スポーツ研究, 15 (1) : 15-23.
- 橋爪祐美 (2012) 初心者のための質的研究ナビゲーション 連載 第三回一質的研究例 (その2) : 介護する女性ー. 高齢者ケアリング学研究会誌, 3 (1) : 29-41.
- 林知里・伊藤美樹子・早川和生 (2002) 障害児の親の会 (SHG) へのかかわり方にみた障害児の母親の心理的エンパワメント・プロセス. 日本健康教育学会誌, 10(1-2) : 9-20.
- 樋野公宏・石井儀光・阪田知彦・藤井祥子 (2018) 男性高齢者の地域活動参加要因とその構造分析ーグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いてー. 計画行政, 41 (1) : 44-54.
- 石橋みちる・中込さと子 (2014) ダウン症候群のある乳幼児を育てる母親が親仲間との経験を活かし、社会化する過程. 日本遺伝看護学会誌, 12 (2) : 18-32.
- 抱井尚子 (2015) 理論からストーリーへー構成主義的グラウンデッド・セオリー法とはー. 青山国際政経論集, 94 : 43-71.
- 株式会社リベルタス・コンサルティング (2025) 『障害者スポーツ推進プロジェクト (障害児・者のスポーツライフに関する調査研究)』報告書. https://www.mext.go.jp/sports/content/20250331-spt_kensport01-000040822_1.pdf, (参照日 : 2025年6月20日).
- 川西正博 (2023) 特別支援学校における運動部活動の地域移行. 体育の科学, 73(4) : 255-258.
- 木下康仁 (2001) 質的研究法としてのグラウンデッド・セオリー・アプローチーその特性と分析技法ー. コミュニティ心理学研究, 5 (1) : 49-69.
- Leitschuh, C. and Johnson, M. (2024) Adapted Physical Activity Across the Life Span. Human Kinetics : Champaign, p. 13.
- 宮地元彦 (2016) 身体活動推奨の立場から. 日本体育学会大会予稿集, 67 (0) : 8_1-8_1.
- 宮原資英 (2017) 発達性協調運動障害 親と専門家のためのガイド. スペクトラム出版社 : 東京, pp. 16-17.
- 永井久美子・香宗我部琢・渡辺俊太郎 (2022) 園長が乳児保育担当者を選定する基準とプロセスー乳児保育担当経験のある園長の語りからー. 保育学研究, 60 (1) : 81-90.
- 戈木クレイグヒル滋子 (2014) 実践 グラウンデッド・セオリー・アプローチ 現象をとらえる. 株式会社新曜社 : 東京.
- 才木クレイグヒル滋子 (2017) 質的研究法ゼミナール第2版グラウンデッド・セオリー・アプローチを学ぶ. 医学書院 : 東京.
- 才木クレイグヒル滋子 (2021) グラウンデッド・セオリー・アプローチ改訂版 理論を生み出すまで. 新曜社 : 東京.
- Shields, N. and Sunnot, A. (2016) Perceived barriers and facilitators to participation in physical activity for children with disability: a qualitative study-. BMC Pediatrics, 16:9. DOI 10.1186/s12887-016-0544-7.
- 塩田琴美 (2022) 障害者のスポーツ参加のもつ意義ー多様性のプラットフォームとしての地域スポーツの可能性ー. 秋山美紀・宮垣元編著, ヒューマンサービスとコミュニティ支え合う社会の構想. 勁草書房 : 東京, pp. 144-166.
- 塩田琴美・徳井亜加根 (2016) 特別支援学校に通学する幼児・児童・生徒のレクリエーション・スポーツの実施に関する基礎調査. 日本保健科学学会誌, 19 (3) : 120-128.
- 杉山文乃・澤江幸則 (2024) 成人期自閉スペクトラム症者における余暇としての運動・スポーツ活動に対する意識. 発達支援学研究, 4 (2) : 41-59.
- 鈴木浩太・小林朋佳・森山花鈴・加我牧子・平谷美智夫・渡部京太・山下裕史朗・林隆・稲垣真澄 (2015) 自閉症スペクトラム児 (者) をもつ母親の療育レジリエンスの構成要素に関する質的研究. 脳と発達, 47 (4) : 283-288.
- 武重希子・堤由美子 (2020) 大腸癌患者の永久

- 的ストーマ保有に伴う体験における意味獲得プロセス. 日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌, 24 (3) : 289-299.
- 藤後悦子・三好真人・大橋恵・井梅由美子 (2022) 地域スポーツ指導者が直面する困難ー特別な配慮が必要な子どもへの指導を通してー. 応用心理学研究, 47 (3) : 178-189.
- 筑波大学 (2025) 令和5年度「障害者スポーツ推進プロジェクト (障害者スポーツの指導・普及等のためのマニュアル等の作成)」成果報告書. https://www.mext.go.jp/sports/content/2024_0514-spt_kensport02-000035919_42.pdf, (参照日 : 2025年7月18日)
- 上川ひなの (2020) 発達障害のある子どもをもつ親が障害を受け入れていく過程に関する文献研究 : 受容と認識の観点から. 生涯発達心理学研究, 12 : 25-31.
- 上田敏 (2020) 「障害の受容」再論ー誤解を解き、将来を考えるー. The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine, 57 : 890-897.
- 綿引清勝 (2011) 知的障害特別支援学校高等部における卒業後の運動・スポーツ継続要因についてー個人因子と環境因子の相互的な関連の分析ー. 筑波大学大学院人間総合科学研究科体育学専攻修士論文.
- Weed, M. (2009) Research quality considerations for grounded theory research in sport & exercise psychology. Psychology of Sport and Exercise, 10 : 502-510.
- 山下揺介・田部絢子・石川衣紀・上好功・至田精一・高橋智 (2010) 発達障害の本人調査からみた発達障害者が有するスポーツの困難・ニーズ. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 61 : 319-357.
- Yoshioka, N., Uchida, K., Shigeto, S. and Yamato, T. (2016) Athletic Ability and Sports Participation in Children with Developmental Disabilities: From Parents' Perspectives. The Asian Journal of Disable Sociology, 15 : 53-65.
- 吉岡尚美・重藤誠市郎・内田匡輔 (2023) 発達障害児・者のスポーツ参加における障壁に関する文献レビュー. 東海大学紀要体育学部, 52 : 31-38.
- 吉澤昌好・藤沼光輝 (2022) 知的障害のある子どもとスポーツを一緒に楽しむ, 北洋輔・澤江幸則・古荘純一編. DCD・不器用な子も楽しめるスポーツがある社会のためにー運動に悩む子・先生・コーチへのメッセージー. 金子書房 : 東京, pp. 97-112.
- 全国特別支援学校長会 (2024) 令和6年度実態調査 : スポーツ環境. <https://zentokucho.jp/files/zentokucyo20/R6cyousta7.pdf>, (参照日 : 2025年7月18日)